

Memories

Dedicated to Gloria, who brought love to me
And so I survived.



余志宏

エラの肖像

Dedicated to Gloria Who brought love to me.....
And so I survived.



余志
宏

ヨブの肖像

著者 余志宏（よし・ひろし）

昭和六十年六月十五日 第一刷発行

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社



東京文京区音羽二一二二二二 郵便番号一二二
電話（〇三）九四五一一一一（大代表）

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 一三〇〇円 ©余志宏 昭和六十年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

ヨブの肖像Ⅰ	笑
ヨブの肖像Ⅱ	待
ヨブの肖像Ⅲ	姦
ヨブの肖像Ⅳ	色
ヨブの肖像Ⅴ	心

245	195	119	59	5
-----	-----	-----	----	---

カバ―絵／壺 賢三
装 幀／村山 豊夫

ヨブの肖像

Dedicated to Gloria

Who brought love to me.....

And so I survived.

ヨフの肖像 I

笑

主はサタンに仰せられた。「では、彼をおまえの手に任せろ。ただ彼のいのちには触れるな」

サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂きまで、悪性の腫物で彼を打った。

ヨブは土器のかけらを取って自分の身をかき、また灰の中にすわった。

すると彼の妻が彼に言った。「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか、神をのろって死になさい」

しかし、彼は彼女に言った。「あなたは愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けなければならないではないか」

ヨブ記（二の六、七、八、九、十）

二週間ごとのベイデイ、つまり給料日の午後は総てがスローダウンしてしまう。秘書のローレンは屋食から銀行へでも廻ったらしく、タイプライターは打ちかけた紙をはさんだまま静まりかえっているし、電話もひっそり沈黙したままだ。

大きな窓の向うには、ニューヨークの初夏の光が眠気を誘うほど満ちあふれてオークの葉の緑に艶艶と照り映えている。

不意に窓を横切って飛んできた鳥が、中庭のフロムナードに添って並ぶ水銀灯の上にとまった。いつとはなくそこに住みついてしまった感じの鳥は丸々と肥って、かなり老いているようだった。古風なガス灯をかたどった鉄のフレームの尖端に足を滑らせて、左右不均衡にひろげた羽根をぎこちない手招きのように動かしている。

稚拙なヴィクトリアン玩具の動きだわと思って見守っていると、漆黒の羽根の動きに陽がはじき、きらきらと虹色の燐光が眼を射る。訳もなく厭な気分にとり憑かれそうな気がして、私は蒼空にむくむくと盛り上がる白い雲を見上げた。ふき上げるシャンペンの泡のような形だった。反射的に、今朝出かける前に冷蔵庫に入れてきたシャンペンを思い出す。

もうすっかり冷えて黒いラベルの上に露の玉が光っているはずである。そしてアロンゾも来ているだろう……と知らぬ間に微笑んでいる。良雄のことを考えると、つい笑顔になってしまうのだ。

人の気配に気付いてふり向いてみると、開いたままのドア口に、待っていた印刷屋のサムが立って

いる。どうやら少し前からそこにいた様子である。

「あら、サムじゃない、そんなところに立って何をしてるの？」

「いや、蒼い空を見上げて嬉しそうに笑ってらっしゃるもんですから、何となく入っていくのをためらってしまっただけですよ、よほど好い事があったんですね」

間の悪さをカバトするつもりか、愚直という言葉が人の形をとったような彼には珍しくひやかし気味な口調だった。

「そうよ、すてきな事があるんだもの」

「ご主人は幸せな人ですね、どんな人かお尋ねしていいですか？」

「彼は彫刻家よ」

「え、スカulpturer……？」とサムは眉を上げたが、「すると日本人の彫刻家というのが……？」

「そうよ、知ってるのね」

誰かに聴いたのだろう。別に気にもせず準備していた原稿を渡した。

「これ、月末までをお願いするわ」

サムはざっと眼を通してうなずいた。

「承知しました。今モーリス局長からも念を押されてきたところです。でも、この仕事をやめてどこかに転職なさるんですか？」

唐突なその問いに私は面食らってしまった。

「いいえ、どうしてそんなこと……？」

「ああ、するとあなたじゃなかったんですね。勘違いしてしまって失礼しました」

サムはおどけた仕方で若禿の頭を下げたが、伏せた眼の奥にちらりと狼狽の色が走った。おや？

と私は思った。

そそくさと帰っていったサムを見送って、一人になってみると、胸に小さなビンが残っている。それがここ一年私の胸の中でもやもやしていた不安を見事に捉えていた。まるで悪夢の足跡のように掴みどころのなかったものを、曖昧な形のままぷすりと刺し貫いて、痛痒くチリチリする。

でもこの不安はどこからきているのか……と思ひ迷った視界を、黒い光が一閃するように、烏が窓の間近を横切つてとび去った。はっと我に返った私の眼を、もう眠たくなるような夏の光のカーテンが眩しく覆っていた。

オフィスから帰ってきて玄關のドアを開けると幽かな油土のにおいが鼻にくる。そのにおいを嗅ぐと不思議に心が和むのだけれど、今日はそれに馴染み深い葉巻の匂いが混っている。予想していたことだが、やっぱり来ている。と私は肩をすくめてしまう。

アトリエをのぞいて、「ただいま。やっぱりアロンゾさんが来たのね」と言うと、「やあおかえり」と良雄が笑顔を向けた。

「石膏屋さんに廻らなきゃと言って、ついさっき帰ったところだよ。君に宜しくと言っていた」「やっぱりね、でも、どうしてあなたの仕事の進み工合が分かるのかしら」

「全くだ。君みたいに毎日見ていれば分かっても不思議はないがね……」

良雄も首をひねっている。ここ一年以上一日も外さず現われるのだから、こればかりはミステリイだ。

まさかとは思いますが念のために娘のアリスに尋ねたことがある。

「あなたアロンゾさんのスパイじゃないでしょうね？ 肖像が完成しましたって報告してるんじゃない

いの？」

「私がアロンゾさんに……？　なぜそんなこと報告するの？」

アリスはきょとんとした眼になっていたが、そんなバカ気たことを言ってみたくなるほどアロンゾの勘は正確だった。

当のアロンゾは、「ヨシオとのつき合いも長いから大体の見当はつくんだよ。彼に限らず、契約している彫刻家の仕事の進み工合が分からないようでは、この仕事はできないよ」という。当り前ではないかという口振りだが、一日も外さない正確さは、やっぱり不思議としか言いようがない。今日も今朝まで彫刻台の上にあった肖像が消えている。

「でも完成ね、おめでとう」

「ああ、ありがとう」とうなずいた良雄は視線を落して軽く溜息をついたが、すぐ笑顔になって続けた。「アリスがシャンペンを当にして喉を鳴らしているよ」

笑ってはいるがどこことなく物憂げな感じは隠せない。

「次はどんな人なの？」

良雄はテーブルの上の大型封筒から写真をとり出した。フランス系らしい六十半ばの老人である。

「キャンディを作っている会社の社長だったが、先月始め心不全で死んだそうだ」

生気のない声だった。背後の棚の上には似たような年齢の首がずらりと並んでいる。ここ数年間に制作した銅像のオリジナル石膏像である。切金の跡に残った油土までカサカサに乾ききった白い顔を正面に向けて、眼を見開いたままうっすらと埃をかぶっている。

その棚にまた一つ新しい首が加わるのだから、おめでたい、祝福すべき日のはずである。ところが一つ仕事を終えると、夫はいつもこんなふうに憑きものが落ちたような顔になる。するとびんに混っ

てきた白髪が急に目立って、生気を失った眼の奥で何かが彼を虐^いんでいる。

初めの三年ぐらいはまるで違っていた。誇らかにシャンペングラスを上げ、楽しそうに笑っていた。それがいつからともなく変ってきて、この一年は段々ひどくなっている。

私はなんとなく言葉を失っていた。

良雄も黙って、虚ろな眼を死んだ老人の写真に向けている。熟年に達した男の疲れきった姿である。沈黙が重たいものに変りかけたとき、玄關の錠がはねる鋭い音がした。娘のアリスが帰ってきたのだ。

「お帰りなさい。ピアノのレッスンはどうだったの？」

「オーケイよ」とそっけない返事をしたアリスは空っぽの彫刻台を見て、「やっぱり今日はシャンペンデイね」と笑顔になった。

肖像が完成した日はシャンペンを抜いてささやかなお祝をする習慣なので、アリスはそんな言い方をしようになったのである。

娘に膝の上に坐りこまれ、頬にキスされて、良雄も笑顔になっている。私も晴々とした気持ちになって台所へ行った。

良雄がワインに浸してくれているステーキ肉を指先でもみ上げると、醤油としょうがの匂いがぶんと鼻にくる。タラゴンやペッパーの香りがそれから入っているが、これとお米をうるかしておくのは良雄の分担である。彼が自分でしないと承知しないのだ。

電気炊飯器のスイッチを入れてサラダの準備にかかったが、私だって、まさか毎晩お米を食べるようになるとは夢にも思わなかった。でも良雄と一緒に三、四年経ってみると、いつの間にかそうなっている。それに本当はブラウンライスが好きなんだけど、彼は米についてはファナティックで

ある。

いつだったかチャイナタウンへ行ったとき、これが最高ですよ、と勧められて、きつと良雄が喜ぶだろうと思ってホワイトゴールドという米を買ってきたことがある。ところが彼は、「なんでねずみの餌を買ってきたんだ」と渋い顔をしていたが、一度も食べないうちにどこかへ消えてしまった。

イタリア米もアメリカ米も受けつけない。カリフォルニア州の日系農場で作っている、コクホーに決めている。

それだけではない。炊くのも大変だ。私の鼻先に左手と右の人差指を立てて、洗って十五分うるかしておき、強火で炊いてふき上げたら細火にして十五分、火を止めて更に十五分蒸らせばよいと細かく説明し、「十五分ずつだから覚え易いだろう」と念を押す。

そう心掛けてやっていたけど、お米だけ炊いてるわけじゃないし、他のガス台やブローラーやオーブンでも一緒に調理している。仕事のことだって完全にシャットオフできるはずはないのだから、どこかで何かが狂うらしい。黙って食べている彼の額に、これはご飯ではないと書いてある。

忙しい時などうるかす時間を少し縮めるより仕方がないけど、一口食べただけで分かるらしく、顔をしかめて「このご飯にはボーンがあるね」等と言いつ出す。

同じ炊いた米なのに、なんでそううるさいのだろうと、一度憎らしくなって、「あら、シラミに骨があったかしら？」と聞き返してやったけど、発音ができないということは聴き分けもできないという簡単な事実を見逃していた。

「あるさ、このシラミがそうだよ」とストレートな返事がかえってきて、私は仕方なくふき出してしまった。

そのうち、「ご飯だけはダメだな、僕がうるかしておこう」と言い出した。冗談だろうと思ってい

たら本気だったのである。以来ずっと彼が準備してくれるようになった。

そういえば、彼はその頃から私が作った朝食を食べなくなっている。

私が出勤するまで寝ていることが多いけど、起きていたら必ず一緒に食べていたが、

「君は出勤前で忙しいだろう。自分で作るから僕の分はいらないよ。この時間には食欲もないし……」
と言いだしたのだ。

一人分でも二人分でも時間に大差はないけど、出勤前は気ぜわしいのも事実だから、大して気にもせず「そう」とうなずいておいた。彼は電気炊飯器を買ってきたり、料理の写真が一ぱい出ている日本の婦人雑誌のようなものを一抱え持ちこんだりしていたが、やがて見馴れぬ食物が冷蔵庫の中で大きなスペースを占めるようになった。

アリスの友達は何も空かして遊びにくるから、いきなり冷蔵庫のドアを開ける。

「このグリーンスタッフは何なの？」と聞く分はかまわないが、一口摘んで腐っていると勘違いして捨ててしまうことも多い。私も大豆が腐っていると思って納豆を捨てたことがある。コンバクターに放りこんでやれやれと思って冷凍庫のドアを開けてみると、同じパッケージが二十個も入っているのびっくりした。調べてみるとみな臭っている。アリスに手伝わせてそっくりコンバクターに投げこんで帰ってくると、台所の真中に良雄が立っていた。抑えた怒りがのぞいている。

「納豆が失くなってるがどうしたんだ？」

「腐^{ゴッド}っていたから捨ててきたところよ」

「おお神よ！ あれを手に入れるために三十キロ車をとばし、二時間半もかけて買いに行ったんだ！」
「でも、本当に腐っていたのよ」とアリスが言う。逆上しかけていた良雄が情無さそうに笑い出した。

そんな失敗もあったけど、

「おかしなもんだね、歳をとるにつれて子供の頃食べていたものを食べたくなる」

当人がそう言って苦笑しているのだから好きなようにさせている。アリスの友達もすぐ良雄の、グリーンスタッフには手を出さなくなった。

しかし、そのうちに週末に私が朝食を整えてやっても、お坐なりにちょっと口をつけるだけになった。

「昨夜眠れなかったせいか食欲がなくて……」等と言うのだけど、それでいてしばらくすると、お腹が空いてきたと言って台所で何か作っている。私自身が拒絶（モウ）されているようで厭な感じがする。嫌味になるとは承知の上で「私が作ったのは好きじゃなかったのね？」と口に出して厭な顔をされたこともある。

一体何を作っているんだろうと背後からのぞきこんでみると、日本料理は見た眼に美しいからつい摘んでみたくなり、時々お相伴してみる。「旨いだろう」と自慢するだけあって、これが意外においしいのである。いつの間にか彼が台所に立っていると、

「何か作るんだったら私の分も作ってね」

「オーケー」

というようになってしまった。要するにクッキングは舌であり、帰するところクリエーティヴ・センシティブティというわけだろう。娘も彼が作ったものなら旨い旨いといって食べるのだから、ずるずると彼の好みに曳きずられてしまう結果になった。

最近の私は中華料理店のさらっとしたご飯より、粘りのある国宝の方をおいしいと思うようになっていたからおかしなものである。